

天文語彙

海考恒治(篇)

(かの部)

かきうゆうせい下級遊星(Inferior Planets)。地球よりも太陽に近く運行する遊星を云ふ。即ち金星水星は之れである。

かく角(Angle)。二つの方角の違を云ふ言葉、例へば互に相反する方角は其角度百八十度とす。其半が九十度即ち直角。之を九十に分つたものを一度とし、更に之れを六十に分つたものを一分とし、更に一分を六十に分つたものを秒とす。天体の見掛けの距離には非常に小さなものがあつて一秒の十分の一又は百分の一を論ずる場合が多い。

かく核(Nucleus)。彗星や星雲の様に面積を持つた天体の中央濃厚部を其核と云ふ。(夫々の條を見よ)
かくそくりよう角測量(Angular measurement)。大

きな角は子午環や垂直環や六分儀等の度盛環に由つて測る。小さな角は赤道儀や天頂儀等の如く多く測微器で測る。(夫々の條を見よ)

かこう下合(Inferior Conjunction)。下級遊星が其運行中に太陽と地球との間に來た場合を云ふ。此時都合が好いと太陽面の經過が見える。

カシオペア座(Cassiopea)。北天のトレミー星座天の河の中にあつて、北極に對しては北斗七星と丁度反對の側になつてゐる。毎年十二月夕天頂に近す。二等乃至三等の星が五箇列つてW型をなして居るから一名W星座とも云ふ。ア星は赤色の不規則變光星である。

かじぎざ旗魚座(Dorado)。ハイエルの星圖(一六〇三年)に始めて現はれた星座でオリオン座の遙か南方にある。毎年一月夕南中するのであるが餘り低く過ぎて我國から見えない。

カストル(Castor)。双子座のA星。赤經七時二十八分、赤緯北三十二度六分、有名な連星で二等と三等の星が五秒の距離にある。相互廻轉週期一千年近頃の研究に由れば此の二星は各々又更に分光器

的連星であると知れた。毎年三月夕天頂に達する
 かせい火星(Mars)。大遊星の一つ。支那では熒惑と
 云ふ、地球の外側を運行する遊星で太陽よりの平
 均距離一、五二(天文單位) 公轉週期一年三二二日
 離心率の大きな(〇、〇九三) 楕圓軌道で黃道面か
 らの傾斜一度五一分あり。火星の直經は僅か地球
 の半で質量は其九分の一、従つて平均密度も水の
 四倍弱である。自轉週期二四時三七分、表面には
 幾分の零圍氣(主に空氣や水蒸氣や炭酸瓦斯)等が
 ある。望遠鏡で眺めると南北兩極に近く白色の面
 積があるが其他は一体に赤褐色であつて其上に暗
 綠色の斑点や線條が見える。此線條は一八七七年
 スキャバレリの發見したもので運河と名附けられ
 る。其後ローエル、ピツケリング等益々此種の發
 見をした。今日では諸大家の發表した火星圖が澤
 山ある。十五年毎に我地球に非常に近づく(最近
 限度一千萬里)多くの諸天体中では事情の最もよ
 く知れた星である。

火星は二箇の衛生を有つてゐる。一八七七年八月
 米國ワシントン天文台の二六吋でホール(Hall)教

授が發見した。光度一三等名をフオボス(Phobos)
 及びダイモス(Daimos)と云ふ。フオボスは火星
 の轉自よりも早い速度で公轉して居る。

カセグレイン式反射望遠鏡(Cassegrainian Reflect
 or)。佛國人カセグレイン氏が一六七二年に發明
 した反射望遠鏡で大凹鏡と小凸鏡とで光を集める
 此式は觀測上の便宜が多いため現在多くの天文台
 で採用されてゐる。例へばゲイクトリアの七二吋
 メルボルの四八吋等之である。

カツシニ(C.D. Cassini)。佛國の天文學者。始めイ
 タリイに生れ、ボロニア大學教授となり、一六六
 六年頃火星や木星の自轉を觀測して名を擧げた。
 一六六九年佛國パリ天文台に招かれ、遂に歸化し
 て終生其所に居た。パリで土星の衛星四つと輪の
 分隙を發見した。理論上の著書も多い(一六二五生
 一七二二死)
カツシニ(J. Cassini)。前項のカツシニの子で、同
 じくパリ天文台の主長であつた。一七一三年には
 ダンキルクとベリナン間の子午線の長さを測定し
 た。彼れはフラムステッド、ハリイ、ニウトン等と
 相知で一六九六年には英國王立學會員に推された

(一六七七生)
(一七五六死)

其子カッシニ(C.F. Cassini)、孫カッシニ(J. D. Cassini)は同じくパリ天文台長となつた

かにざ蟹座(Cancer)。黄道十二星座の一で双子座と獅子座との間にある。毎年八月始め太陽が此處を通過する。今より二千年前夏至点が此星座にあつた。此星座は四等星が五つあるのみで他は皆微星である。ガ星とデ星との間にプレセペ(Praesepse)又はM4と云ふ大星團があつて肉眼でもよく見える。

かにせいうん蟹星雲(Crab Nebula)。M第一番の別名で牡牛座ゼ星の北面一度の所にある。形が蟹に似て居るにより此の名がある。N.G.C. 一九五二番ガニミート(Ganymede)。木星の第三遊星で一六一

〇年カリレオ發見、質量は木星の一萬二千分の一であるが、それでも木星の諸衛星中最大である。

週期は七日三時四十三分である。

カノープス(Canopus)。アルゴ座ア星。赤經六時二分、赤緯南五二度三分。分光型F。此星はシリウスに次ぐ大光輝の星で負〇・九等である。距離は大約五百光年、我太陽に比ぶれば直徑百三十倍、光量

五萬倍で、ウラルキー氏(Walkley)は此星が我宇宙の中心体であるとの説を出した事がある。

此星は毎年二月頃南中するのであるが何分にも南緯が高いため見えにくい。支那では此星を壽考人として崇拜し之が見えれば幸福だと信じた。

カプテイン(J. G. Kapteyn)。蘭國グロニンゲン大學教授。星辰統計學に於て現時有數の學者である。先にシル氏(D. Gill)が南阿喜望峰天文臺で撮影した多くの寫眞板を整理して喜望峰寫眞光度表(Cape Photographic Drummasterung)を發表した。又一九〇四年には恒星個有運動研究の結果二大星流説(Two Star Streams)を發表して世を驚かした。

カベンディッシュ法(Cavendish Method)。地球の引力を計るためカベンディッシュ(一七三一生)の發明した方法であつて振り秤の重りの傍に鉛球を置いて其の引力を計り之を地球の引力と比較するのである。ガベンディッシュは此方法に由り地球の平均密度五・四五を得た。

カペラ(Capella)。馭者座のア星。赤經五時九分

赤緯北四五度五四分、光度〇・二、分光型Gで我太陽と同型である。此星は有名な分光連星(週期百四日)であるが、一九二〇年夏米國のマイケルソン教授(A. A. Michelson)は干涉法に由つて現視的に此連星の距離を計つた。

かみのけざ髪座(Coma Berenices)。詳しく云へばベレニスベレニスの髪。一六一〇年テヒーヨーの發明した星座で獅子座と牧天座との間にある。毎年五六月夕天頂に来る。此星座は四等星が二つあるのみ他は微星然し此の邊に星雲が非常に多い。

からすざ鳥座(Corvus)。南天のトレミー星座で乙女座の南西にあり、毎年五月夕南中する。ベ、エ、ガ、デの四星が形よく並んで春の天を飾る。

カリスト(Callisto)木星の第四衛星で一六一〇年ガリレオ發見す。光度六等。週期一六日一六時三二分。

ガリレオ(Galileo Galilei)。イタリアの物理學者及天文學者。十九歳の時既に振子の等時性を發見、一五八八年から三年間ピサ大學講師となつた。其後パドヴァ大學教授となり、一六〇九年始めて望遠鏡

を作つて、木星の衛星、月の表面、金星の盈虚、太陽の黒点等を發見した。一六一〇年以後、フイレンツエ候に招かれ其の保護の下に居た、彼は熱心な地動説の主張者で、ために度々法庭に引き出され教權から學説の變改を迫られたが應ぜず遂に老齡を以つて投獄せらるゝに至つた。晩年はフイレンツエのアルセトリ(Arcetri)に退隱。(一五六四生、一六四二死)

カルシウム(Calcium)。化學原素の一つで、原子量四〇・一、太陽を始め多くの恒星のスペクトル中に輝線或は吸収線として現はれる。特にフラウンホーフェル線のH(波長三九六八・六)及びK(波長三九三三・八)は著しいカルシウム線である。

ガレリ(G. Galilei)。獨逸ブレスロウ天文台長。始めベルリン天文臺に居た時一八四六年九月ルベリエの論文を見て始めて海王星を現視的に發見した。一八九四年には彗星目錄を發表した。(一七一〇生、一八一〇死)

かんじやうせいうん環狀星雲(Annular Nebula)。翠座ベ星の東南にある星雲で謂はゞ遊星狀星雲の一種であるが外縁部のみが特に輝いてゐるので環狀に見える。其直徑九〇秒、中央に一三等星がある